

出エジプト記25章「主の語られる聖所」

1A 幕屋のための奉納物 1-9

2A 聖所の祭具 10-40

1B 至聖所 10-22

1C 契約の箱 10-16

2C 宥めの蓋 17-22

2B 聖所 23-40

1C パンの机 23-30

2C 燭台 31-40

本文

出エジプト記 25 章を開いてください。ついに私たちは、主が幕屋を造ることを命じておられる箇所に入ります。

私たちは、出エジプト記の学びで、世から救い出されるイスラエルの民の話を読んできました。私たち神の民が、世から救い出された者たちであることをそして、イスラエルの民がシナイ山の麓で、十戒を始めとする掟が与えられたところを見ました。私たちが、世において神の命令の中に生きていくことの必要性を知りました。そして 25 章から長いこと、実に出エジプト記の最後まで、いやレビ記に至るまで、幕屋についての教えになります。

初めに私が聖書を通読した時に、ちょうどこの辺りから躓き始めたことを思い出します。創世記はよし、出エジプト記の前半部分はよし、けれども、なんで幕屋のこんな細かい部分が聖書に長々と書かれているのか？と不思議に思いました。レビ記は苦痛で、苦痛で仕方ありませんでした。ところが、旧約聖書において多くの部分が、幕屋、その後の神殿、それから幕屋や神殿でいけにえを献げる部分に多くの紙面が割かれているのです。さらには、新約聖書においても、教会が聖霊の宮であると書かれており、さらにも黙示録には、天における聖所、さらには黙示録の最後、新しいエルサレムは、神の幕屋が天から降りて来る、という場面で終わっているのです。神は、相当、このことに情熱をかけて、私たちにお語りになりたいと願われているのです。

実は、福音書にも幕屋のことが、じっくりと書かれているのです。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」神が人となられたということ。そして私たちの間に住まわれたというところですが、ここの「私たちの間に住まわれた」の直訳は、**幕屋を張られた**、というものです。そうです、イエス・キリストにあって神の幕屋が実現した、と言っていいのです。これから、その詳しいことを話していきます。したがって、幕屋の理解が私たち信仰者にとって、

いかに重要かが分かるでしょう。そして、このことが分かると、私たちの信仰生活がこの世において、ゆるぎないものとなっていきます。

主はモーセに語られます、8 節、「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは彼らのただ中に住む。」主が、イスラエルの民の只中に住まわれるためなのだ、ということです。これまで、天から降りて来られただけで、その聖さと恐ろしさで死ぬかもしれないとまで思ったのですが、主が只中に住んでくださると言われるのです！事実、民数記に入りますと、イスラエル人の宿営は幕屋を真ん中にして、広がった配置になっています。もちろん、天地を造られた主がその中に入り切ることはできません。そういう意味ではなく、親しく交わるという意味です。ただ存在するのではなく、人格的に知って行くということです。イエス様は十字架に付けられる前の夜に、父なる神に、こう祈られました。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」主なる神を、親しみをもって、人格的に知ることそのものが、永遠の命なのだということです。キリストとの命あるつながりが、永遠の命であり、物理的に永遠に生きることが、永遠の命の本質ではありません。

祭司たちがこの中に入り、大祭司が至聖所と呼ばれる、聖所の中の奥の部分に入りますが、そこで主は、そこに臨在して下さって、語られるのです。「25:22 わたしはそこであなたと会見し、イスラエルの子らに向けてあなたに与える命令を、その『宥めの蓋』の上から、あかしの箱の上の二つのケルビムの間から、ことごとくあなたに語る。」主がそこにおられて、語られるというのです。

ここで知って行かなければいけない霊的な真理があります。ヘブル人への手紙は、こうした幕屋のこと、モーセや律法のことを背景に持ったヘブル人、ユダヤ人に対して書いている手紙ですが、そこでこのように解説しているのです。「8:5 この祭司たちは、天にあるものの写しと影に仕えています。それは、モーセが幕屋を設営しようとしたときに、御告げを受けたとおりのものです。神は、「よく注意して、山であなたに示された型どおりに、すべてのものを作らなければならない」と言われました。」終わりにになりましたか、天にあるものの写しと影なのです。天にある神の住まわれる所、神の御座があり、その写しや影として地上の幕屋、また神殿が建てられているのだ、ということです。また、新約聖書には、私たちが御霊の神殿であり、神の家で仕える祭司でもあると書かれています。そして、今、話したように、イエス・キリストご自身が、幕屋が示している実体であるということです。ですから、幕屋と神殿が旧約、新約を通じて中心的に書かれているのです。私たちは、その心臓部分にもあたるような、神の聖所の陰となっている幕屋の造り方を読んでいきます。

1A 幕屋のための奉納物 1-9

1 【主】はモーセに告げられた。2 「わたしに奉納物を携えて来るように、イスラエルの子らに告げよ。あなたがたは、すべて、進んで献げる心のある人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。

まず、幕屋を造るにあたって必要な材料を、奉納物として受け取らないといけません。ここで注目すべきは、「すべて、進んで献げる心のある人から」とあることです。「受け取らなければならぬ」ともありますね。牧者チャック・スミスが、カルバリーチャペルでは、「什一献金や献金の時間の時は、献金を取るといわずに、献金を受けると言わないといけない。」と言っていました。つまり、進んで献げる人たちがいて、その献げ物を受け取るのです。徴収するではありません。

私たちの神が、分け与える神であることを思い出してください。「ロマ 8:32 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。」主はいいやいやながら、私たちの罪のために御子を死に渡されたのではなく、私たちを愛するがゆえに、自ら進んでこの子をおさげになりました。したがって、この与える神を私たちは礼拝しているのですから、与える神と交わっているのですから、私たちの心も喜んで捧げたいと願うようになるのです。

そして、喜んでささげる人は計算をしません。後にイスラエル人たちが捧げた時に、祭司たちがモーセのところに来て、「民は何度も持って来ます。【主】がせよと命じられた仕事のためには、あり余るほどのことです。(36:5)」と言いました。そして献げ物は、嫌々ながら行うものではありません。「Ⅱコリ 9:7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」ここの「喜んで」は、「陽気で、浮かれている」という意味を表します。自ら進んで、喜んで献げる物です。

3 彼らから受け取る奉納物は次のものである。金、銀、青銅、4 青、紫、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛、5 赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、6 ともしび用の油、注ぎの油と、香り高い香のための香料、7 エポデヤ胸当てにはめ込む、縞めのうや宝石である。

献げる物の材料ですが、この荒野においてどこでこれらの貴金属を持っていることができたのでしょうか？覚えていますか、彼らがエジプトを出る時に、エジプト人からはぎとりなさいと神が言われていたのです。彼らは奴隷でしたから、それに見合う報酬の賃金として、それら金銀を受け取ることができたのです。

これらそれぞれに、霊的な意味があります。イエス・キリストのご栄光とその働き、また天にあるものを表しています。「金」については、天にある神の栄光を示しています。「黙 21:18 都の城壁は碧玉で造られ、都は透き通ったガラスに似た純金でできていた。」そして銀ですが、これは贖いを示しています。「出 30:16 イスラエルの子らから償いのための銀を受け取ったなら、それを会見の天幕の用に充てる。こうしてそれは、イスラエルの子らにとって、あなたがたのたましいに宥めがなされたことに対する、【主】の前での記念となる。」神のものとなった長子たちを、贖い金によって自分たちのもとの買い戻すのです。その時に銀が使われました。そして、青銅は、裁きを示しています。「民 21:9 モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をか

でも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。」イスラエルが罪を犯したので、蛇によって殺されていったところ、青銅の蛇を旗竿に掲げ、それを見たら生きたのですが、その青銅は蛇である悪魔が、神に裁かれたことを意味していました。

そして撚り糸ですが、青は天を表しています。「エゼ 1:26 彼らの頭上、大空のはるか上の方には、サファイアのように見える王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。」次に紫ですが、これは王の衣の色です。「マル 15:17-18 そして、イエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、それから、「ユダヤ人の王様、万歳」と叫んで敬礼し始めた。」そして緋色は、血潮の色です。固まった血液のように黒ずんでいる赤です。「イザ 1:18 「さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」そして亜麻布ですが、白いのは、清さや正しさを示しています。「黙 19:8 花嫁は、輝きよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

それから幕に使う幕の材料が書かれていますね、これについては次の章の学びで取り組みたいと思います。

さらに、「アカシヤ材」があります。アカシヤ材は、シナイ半島に見ることのできる砂漠に生える木です。イスラエルでもネゲブ砂漠にたくさん生えています。非常に強く、虫に食われることのない強さを持っています。私も見ましたが、決して見栄えのよい木ではありません。これが契約の箱だけでなく、供えのパンの机、板や柱、祭壇など多くの祭具に用いられています。この木に形容して、イザヤがイエス様の生い立ちを次のように預言しました。「イザ 53:2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。」いかがですか、イエス様はアカシヤ材のように見とれるような姿をお持ちではありませんでした。けれども、虫に食われることのない堅さを持っているのと同じように、心の内を罪で汚されることもありませんでした。

そして、油や香料があります。油は、聖霊の働きを示します。香料は、神に対する香しさを示しますが、捧げられる祈りを指していることもあります。このことも、出てきた時に詳しくお話していこうと思います。

それから宝石です。祭司の祭服のエポデや胸当てに付けるものです。これは神の御座にある栄光を示しています。

8 彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは彼らのただ中に住む。9 幕屋と幕屋のすべての備品は、わたしがあなたに示す型と全く同じように造らなければならない。

これでもうお分かりになられたかと思いますが、なぜここまで正確に神は造らなければいけないか？と言いますと、天にある聖所の模型であること、そしてキリストにある神の栄光を示しているからです。

2A 聖所の祭具 10-40

1B 至聖所 10-22

主は、これから聖所の中の祭具について啓示していかれます。そして 26 章では幕について、27 章では祭壇や外庭について教えられます。つまり、神の着座されている中心部から、少しずつ離れたところを教えて行かれるのです。

1C 契約の箱 10-16

10 アカシヤ材の箱を作り、その長さを二キュビト半、幅を一キュビト半、高さを一キュビト半とする。11 それに純金をかぶせる。その内側と外側にかぶせ、その周りに金の飾り縁を作る。12 箱のために金の環を四つ鑄造し、その四隅の基部に取り付ける。一方の側に二つの環を、もう一方の側にもう二つの環を取り付ける。13 また、アカシヤ材で棒を作り、それに金をかぶせる。14 その箱を棒で担ぐために、その棒を箱の両側の環に通す。15 その棒は箱の環に差し込んだままにする。外してはならない。16 その箱に、わたしが与えるさとの板を納める。

主が初めにモーセに示されたのは、「契約の箱」と呼ばれるものです。16 節に、「その箱に、わたしが与えるさとの板を納める。」とありますが、主がイスラエルに与えられた十戒を書き記した板がそこに入っています。幕屋の中で、最も中心的な至聖所の中の唯一の祭具であります。



その材料はアカシヤ材です。イエス様が人として来られて、見栄えのないお姿でありながら、外界の苛酷さの中でも虫によって食われない、体を持っていながらも罪を犯されなかった姿を示しています。そして、寸法ですが、「キュビト」が用いられています。これは膝から人差し指までの長さと言われており、約 44 センチです。長さは二キュビト半なので 1.1 メートル、幅と長さが 66 センチという小さいものです。幅と長さが同じ寸法です。そして長さは二倍より若干少ないです。聖所も同じような寸法で、一対一対二であります。至聖所が立方体で、聖所が二対一になってちます。

そしてこれを「純金」で覆います。契約の箱が安置される聖所の中はすべて純金で覆われる、あるいは純金そのもので造られます。これは当然ながら、神の栄光の輝きを表しています。神がご臨在される所は燦々たる光の輝きで満ちていました。使徒パウロは神をこのように説明しています。「I テモ 6:16 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。」

そして、この箱をかつぐための「棒」が差しこまれます。幕屋というのは、まさにテントみたいなも

ので移動用になっています。荒野の旅をしているイスラエルの民が取り外して、移動し、また取り付けることができるように移動用になっています。そのための運搬の棒であります。運んだ後も「外しては」いけません。なぜか？契約の箱に決して触れてはいけなからです。後に、ダビデがエルサレムに神の箱を運び上ろうとしたとき、牛車に乗せて運んでいたのですが、そこから神の箱がひっくり返りそうになったので、ウザという人が手で押さえました。すると彼は、その場で打たれて死んだのです。今、読んだように、神は近づくこともできない光の中に住まわれる方だからです。

そして、22 節を見ると、このさとの箱の上で主がモーセと会見し、そこで語ってくださるのです。つまり契約の箱は、まさに主ご自身の臨在そのものを表しています。その本質が十戒だったので。主がイスラエルの民と結ばれた契約の根本は、その戒めであります。古い契約においては石の板で書き記されているものは、エレミヤが後に預言したように、新しい契約では心に書き記されるようになりました。イエス・キリストを信じる者は、御霊が内に住んでくださり、神の命令は自分の肉の力で守るものではなく、変えられた心の内側から出てくるもので、自発的であり、愛の動機によって守るものになっています。

そして十戒の学びの時、なぜ私たちが偶像を拝んではならないか、第二の戒めの説明の時に話しましたが、私たちの神は霊であられ、形を持っていないからです。そして本質は「言葉」であることをお話ししました。使徒ヨハネは、イエス・キリストを語り始める時に福音書で「はじめに、ことばがあった。(ヨハネ 1:1)」と言っています。第一の手紙では、「いのちのことば」とあります。そして黙示録 19 章 6 節には、「神のことば」とあります。ですから、私たちが神のことばに触れる時に、御霊によって主ご自身の本質に触れることになるのです。

2C 宥めの蓋 17-22

17 また、純金で『宥めの蓋』を作り、その長さを二キュビト半、幅を一キュビト半とする。18 二つの金のケルビムを作る。槌で打って、『宥めの蓋』の両端に作る。19 一つを一方の端に、もう一つを他方の端に作る。『宥めの蓋』の一部として、ケルビムをその両端に作る。20 ケルビムは両翼を上の方に広げ、その翼で『宥めの蓋』をおおうようにする。互いに向かい合って、ケルビムの顔が『宥めの蓋』の方を向くようにする。21 その『宥めの蓋』を箱の上に載せる。箱の中には、わたしが与えるさとの板を納める。22 わたしはそこであなたと会見し、イスラエルの子らに向けてあなたに与える命令を、その『宥めの蓋』の上から、あかしの箱の上の二つのケルビムの間から、ことごとくあなたに語る。

「宥めの蓋」と呼ばれるものは、契約の箱の蓋です。英語では、"Mercy Seat"つまり、「憐れみの御座」となっています。これはアカシヤ材ではなく、すべて純金で作られます。

その蓋と一体として、一部としてケルビムが掘られます。模型の写真を見ていただくと分かりますが、二人のケルビムが自らの翼を重ねるようにして、ちょうどひれ伏しているような姿になっていま

す。(ちなみに、「ケルブ」はこの天使の単数形であり、「イム」はヘブル語で複数形を表すので、「ケルビム」となります。)これはまさに、天において、神の御座でケルビムが主を礼拝している姿です。黙示録には御座の中央とその回りに四つの生き物がいて、昼も夜も絶え間なく叫び続け、「4:8 聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」と言っている姿を見ます。ケルビムは礼拝をささげる天使であり、御座の回りで行なわれているのは礼拝なのです。

この契約の箱と宥めの蓋は、聖所の中でも至聖所と呼ばれる部屋に安置されますが、そこには大祭司が年に一度だけ入り、そしていけにえの血を携えて、この蓋のところに血を振りかけて、イスラエルの民の罪の贖いをします。神の怒りが、その血の流しによって、宥められることを意味していました。

旧約聖書のギリシア語訳、七十人訳では、ヨハネ第一 2 章 2 節と同じ言葉が使われています。「2:2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」なだめの供え物、というのが「宥めの蓋」なのです。イエス様が十字架に付けられた時に、この方は「神よ、神よ、なぜあなたはわたしをお見捨てになられたのですか。」と言われました。その嘆きの言葉は、イエス様が父なる神から引き離された瞬間でありました。神の怒りをご自分の体によって受けた瞬間でありました。そして神は、イエス・キリストが流されたその血によって、ご自分の、人類が犯した罪に対する怒りをしずめられたのです。その贖いですべての怒りは注がれたのでした。

2B 聖所 23-40

1C パンの机 23-30

23 また、アカシヤ材で机を作り、その長さを二キュビト、幅を一キュビト、高さを一キュビト半とする。24 これに純金をかぶせ、その周りに金の飾り縁を作り、25 その周りに一手幅の枠を作り、その枠の周りに金の飾り縁を作る。26 その机のために金の環を四つ作り、四本の脚のところの四隅にその環を取り付ける。27 環は枠の脇に付け、そこに机を担ぐ棒を入れる。28 アカシヤ材で机を担ぐための棒を作り、これに金をかぶせる。29 また、注ぎのささげ物を注ぐための皿、ひしゃく、瓶、水差しを作る。これらを純金で作る。30 机の上には臨在のパンを置き、絶えずわたしの前にあるようにする。



次に主がモーセに示されたのは、「臨在のパンの机」です。これは、聖所の中の北側に置かれます。ですから、祭司が天幕から入ると右側に安置されています。契約の箱と同じように、アカシヤ材に純金をかぶせて、そして持ち運ぶことのできるために、棒とその管も作ります。寸法は長さ二キュビト、幅が一キュビトで、聖所の形と同じ二対一になっています。そしてレビ記に「注ぎのさ

さげ物」が出てきますが、そのための用具もこの机といっしょに作るように命じておられます。

大事なのは、これらパンが、30 節「絶えずわたしの前にあるようにする」ということです。レビ記 24 章 5 節を見ますと、パンは十二個あり、一並び六個ずつ、二並びに置く、とあります。つまり、パン一つ一つがイスラエル各部族を表しており、彼らが絶えず主の前にあるようにする、という意味です。したがって、神は契約の箱によってご自分が臨在されていることを表していましたが、供えのパンの机は、イスラエル人が神の前に存在しつづけていることを表していました。パウロは、主の再臨について、「I コリ 13:12、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」と言いましたが、そのように私たちの命は主の前に絶えず置かれている、つまり、主に知られているのです。

そして、パンですから、それは自分たちの体を養う糧であります。私たちのいのちは、完全に神に拠り頼んでいます。イエス様はご自身を、「わたしがいのちのパンです。(ヨハネ 6:35)」と言われました。そして、約束は「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」です。ゆえに、私たちはこのように礼拝を捧げに来ているのです！

2C 燭台 31-40



31 また、純金の燭台を作る。その燭台は槌で打って作る。それには、台座と支柱と、がくと節と花卉があるようにする。32 六本の枝がその脇の部分から、すなわち燭台の三本の枝が一方の脇から、燭台のもう三本の枝がもう一方の脇から出る。33 一方の枝に、アーモンドの花の形をした、節と花卉のある三つのがくを、また、もう一方の枝にも、アーモンドの花の形をした、節と花卉のある三つのがくを付ける。燭台から出る六本の枝はみな、そのようにする。34 燭台そのものには、アーモンドの花の形をした、節と花卉のある四つのがくを付ける。35 それから出る一对の枝の下に一つの節、それから出る次の一对の枝の下に一つの節、それから出るその次の一对の枝の下に一つの節。このように六つの枝が燭台から出ていることになる。36 それらの節と枝とは燭台と一体にし、その全体は一つの純金を打って作る。37 また、ともしび皿を七つ作る。ともしび皿は、その前方を照らすように上にあげる。38 その芯切りばさみも芯取り皿も純金である。39 純金一タラントで、燭台とこれらのすべての器具を作る。

次は燭台です。すべて純金で作り、なんと一タラント、つまり 34kg を使って作ります。そして形は、アーモンドの枝と花です。後に、祭司アロンの杖からアーモンドの花と実がなりますが、「いのち」を表しているのでしょう。いのちがあり、そして光があります。使徒ヨハネはイエス様について、「ヨ

ハ 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。」と言いました。

祭司はともしび皿に油を絶やさず注ぐことによって、聖所全体が明るいままでいるようにしています。同じように、私たちは絶えずイエス様の光の中に生きなければいけない、ということです。イエス様は、「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。(ヨハネ 8:12)」と言われました。そして、使徒パウロはエペソの教会にこう書いています。「エペ 5:8-9 あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。」汚れや罪を捨てて聖さの中に歩みなさい、という勧めです。

枝が七つあることに注目してください。「七」はすでに創世記から数多く出てくる、神の数字、完全数です。そして興味深いことに、黙示録1章には、七つの燭台の間を歩かされているイエス様の姿が出てきます(1:12-13)。そして七つの燭台は七つの教会である、とイエス様は説明されました(1:20)。キリストの教会は、世に対して光であります。

40 よく注意して、山であなたに示された型どおりに作らなければならない。

主は強く、よく注意しなさい。山で示された型どおりにしなさいと命じられます。同じように、私たちは、よく注意して主の栄光を眺める必要があります。主の栄光の形をそのまま受けとめていく必要があります。そこで、私たちは自分で何か変えてみよう、改良してみようという気持ちを起こしてはいけません。私たちの務めは、キリストにある神の栄光の御姿をそのまま受け入れ、仰ぎ見ることです。